

日 作 九 支 報
58: 91, 1991

宮崎県の早期水稲の早進化について

愛甲 一郎
(西都農業改良普及所)

いよいよ、早期水稲についても入札制度がはじまった。ただでさえ本州産コシヒカリの過剰生産や、福岡・佐賀・熊本県等の早期コシヒカリへの参入により、出荷の速さを売物にしてきた宮崎コシヒカリもますます危機にさらされてきた訳である。

そんな情勢の中、「宮崎コシヒカリのとるべき体制は？」と問われても、「今以上の早進化を、今以上の品質・食味の向上を!!」と、これといった方策がないまま常に尻をたたかれるのが現状であった。

ところが、最近になって、早限のライン、技術、行政的対応等、早進化に向けての総合的な取り組みが明確にされてきたのでここに紹介しよう。

まず、早限のラインについてである。植え付け後の晩霜の問題、出穂期前の最低気温・日照時間の問題、収穫時の天候の問題等を考慮すると、3月中～下旬移植の、7月20日前後の収穫という早限のラインが設定される。

次に、この早限ラインに移植・収穫できる技術である。様々な試験がなされてきた中で、最も期待できるのが苗の種類によるものである。数年前よりポット苗移植による早進化の可能性を検討してきているが、ポット苗の場合、移植後の植え傷みが少なく、初期生育が旺盛であり、晩霜の被害を受けにくいいため早植が可能である。そのため、従来の稚苗移植と比較して約10日程度の早進化が可能である。実際に7月19日に収穫できた事例もある。ただし、早進化という意味ではかなり飛躍的な結果を生むことができたが、低コスト稲作を推進する現状では、苗箱が稚苗より2倍は必要であること、育苗期間も45日と長いこと、資材や農作業機械が従来のもので使えないなど解決すべき問題点はかなりある。

次に考えられるのは、新品種の導入である。幸いにも宮崎県総農試の育成した宮崎30号なる系統が注目をあびている状況で、これを使わない手はない。コシヒカリよりも7～10日は早く出穂し、稈は短く倒れにくいいため栽培もしやすい。又、食味についても、コシヒカリ並とはいえないまでもかなりうまいものである。「九州の稲作は品種はよく出るが、品種を育てる道を知らない。」とある人がいわれたが、まさにそのとおりだと思う。ここで宮崎県の米販売にとってもアピール度のしっかりした品種を本腰いれて育ててはと思うのである。

最後に行政的対応である。今年より、行政、試験場、現場が一体となって取り組み始めた事業がある。試験場の開発した稲の生育診断予測システムを現場に導入し、実際の生育との整合性を確認しながらこれからの生育状況の予測を流す。そして、現場では今後の管理指導をしながら、一方では綿密な出荷計画を策定、卸に情報を提供し、その情報どおりの出荷を行う。こうすることにより、産地と卸との信頼関係を築き、宮崎コシヒカリの有利販売につなげようとするのである。

以上のような柱を中心に早進化に取り組んでいる訳だが、このように明確に目標が打ち出されると現場での対応にも意気込みが湧いてくる。ただ、宮崎県の稲作、特に早期水稲地帯をみると、必ずしも稲作を基幹作目として位置付ける農家は多いとはいえない。入札制度の導入による米の商品価値が、今以上に高まると同時に今以上の良質・良食味なものを要求される時代を迎えて、暖地での米でかせげる農家づくり、体制づくりというものを忘れてはならない。そして、そのことを実践できる農家をいかに育てていくかということもこれからの課題であろう。